



# 赤坂真一郎 | フツウ・ノイエ [2010]

Shinichiro Akasaka

中村好文

Yoshifumi Nakamura



1階ラウンジピットのピクチャー・ウィンドウ。外はご覧のように素晴らしい雪景色。赤坂さんと私がちよこっと寄りかかっている窓台の高さがもとの床レベルだったが、工事中で掘り下げ、地面の中に沈み込むようなラウンジピットにしている【写真8点とも：酒井広司】

札幌在住の若手建築家、赤坂真一郎さんが自宅を普請中だということ、そしてその敷地が住宅街の外れにある森に面した急傾斜の土地であることは、赤坂さん本人から聞いていました。わざわざそういう一筋縄ではいかない土地を格安で手に入れ、そこに自邸を建

てようという若々しいチャレンジ精神を頼もしく思いつつ、私は話に耳を傾けました。

そして、2010年の晩秋、完成したその住宅を意外に早く見学するチャンスが巡ってきました。普段なら完成してしばらく経って、生活の匂いが染み込み始めたところが住宅の見ごろだと思っていますが、この住宅に限っては、早く見に行ってもいいような気がして(赤坂さんの家なら、時間が経ってもさほど生活感が染みつかないだろうと勝手に思ったのです)出掛けていきました。そしてその見学で受けた鮮やかな印象が、今回の雪景色の取材に一直線に結びつきました。

取材は北海道全域が何年かぶりの大雪に見舞われた翌日でした。さいわい当日は、前日まで吹雪だったことが信じられないほど穏やかに晴れ上がり、気温も上昇して早春を思わせる陽気でした。とはいっても、建物のほうは深々と雪に埋もれていたことは言うまでもありません。雪国の建物は雪景色が似合って欲しいと思いますが、雪帽子をかぶった立方体の建物は、どこか絵本の中に登場する建物の



【建築概要】名称：フツウ・ノイエ | 所在地：北海道札幌市 | 家族構成：夫婦 | 敷地面積：247.00m<sup>2</sup> | 建築面積：52.99m<sup>2</sup> | 延床面積：97.58m<sup>2</sup> | 規模：地上2階 | 構造：木造(在来工法) | 設計：赤坂真一郎

ようでも愛らしく見えました。

さて、ここで「フツウ・ノイエ」と名付けられたこの住宅について、簡単に説明しておきましょう。この建物は2階建てですが、先ほども書いたように敷地が急な斜面なので、道路のレベルからはブリッジを渡って2階からアプローチします。2階部分には玄関とキッチンと洗面・浴室の他に、トイレやユーティリティなどの水まわりがおさまられていて、そのレベルから570ミリほど下がったところに食堂があります。食堂にたどり着くまでを振り返ってみますと、まず道路から4段ほど階段を下りてブリッジへ、玄関レベルから3段下りて食堂へ、という具合に、下へ下へと下降していくことになりますが、天井を見上げると、天井もゆるやかに前下がりに傾斜して、玄関ホールから次

第次第に低くなっていくように作られていることに気づきます。といっても天井の下降は階段を下りきったところまでで、そこから今度は逆に上がっていきます。簡単に言えばごくゆるいV字型の中折れ天井になっているのです。そして、次第に閉じられてきた気持ちが、階段を下りきったとたん一気に開くと呼応して、前方左手に大きな嵌め殺し窓に切り取られた森の眺めが待ち受けています。ここまで来て「そうか、車を降りてからの下降する意識の流れは、この風景と劇的に対面させるための演出であったか!」と気づき、思わず膝を打つのは、たぶん、私だけではないはず。訪問者は赤坂さんの仕掛けた建築的シーケンスの「罫」にまんまとひっかかってしまうのです。



ベレー帽のような雪帽子をかぶった「フツウ・ノイエ」。エキスパンドメタルのブリッジを渡って玄関にアプローチする。ブリッジ右側にハイヒールの女性用の歩廊がつけてある。うっかりこの上を歩くとモノロー・ウォークになるのでご用心(本文参照)



雪景色の森越しに遠望する建物。壁と開口部をきっぱり分断したデザイン。開口部の数とその配置には赤坂さんの細心の検討のあとが窺える



夏期、森越しに遠望する建物。焦げ茶色の外壁は塗装ではなく、唐松の羽目板を燻煙処理したもの。建物のそばに寄り寄り、玄関に入った瞬間など、どこからともなく美味しそうなスモークハムの匂いがする



2階食堂から吹き抜けと三角テラスを見る。テラスのアルミ板に森の緑が映り込んでいるのが見える。この三角テラスが視覚と聴覚の受容装置として働く

余談になりますが、「毘」と言えば赤坂さんはブリッジでも愉快な「毘」を仕掛けていますので、ついでにそれも紹介しておきましょう。雪かきの手間を省くためだと思いますが、ブリッジは目の荒いエキスパンドメタル製にしてあり、そのエキスパンドメタルの端っこには幅の狭いチェッカープレートが一直線に敷いてあります。「これは自転車用？、それとも高所恐怖症の人のため？」と私が尋ねますと、赤坂さんは「ハイヒールの女性用です」とサラリと応えました。さらにつづけて「幅を狭くしてハイヒールで歩く女性が知らず知らずのうちにモンロー・ウォークになるようにしたんです」とのこと。「なるほど!」。こうしておけばハイヒールで平均台の上を歩くようになるので、歩行するときの腰つきはちょっとマリリン・モンロー的にならざるを得ないわけです。建築に仕掛けられたこうした遊びぐらい私の心をくすぐり、愉しませてくれるものはありません。「おぬし、デキルな!」と私は心の中で呟きました。

先ほど書いたとおり、この大きな窓の外に広がる傾斜した森の眺めは圧倒的です。直角二等辺三角形のテラスが部屋に食い込んでいるせいで、食堂の平面はホームベース型の五角形になり、階下にある居間を見おろす吹き抜けはひしゃげた四角形になっています。4間角の平面を用途に応じて矩形に分割していく方法もあったはずですが(というより普通ならそうするところですが)、そうしないで、わざわざ「ヘンナ・カタチ」にしておくところが赤坂流なのでしょう。平面図を眺めていると、三角形のテラスが、ブーメランのように森の樹木の間をぬいっつ飛来してきて、正方形の建物にグサリと突き刺さったようにも見えます。

ここでは、大きな嵌め殺し窓、異形の吹き抜け、三角形のベランダが三つ巴になり、視覚的にも、空間的にも、聴覚的にも圧倒的な効果をもたらしています。あらためて言うまでもなく、この部分がこの住宅のとおきのおきの見せ場ですから、赤坂さんの説明も次第に熱気を帯びてくるのでした。

赤坂さんがこの場所でテーマにしたことのひとつは「自然光」です。大きな窓から入ってくる暖かい陽光、樹々が茂ったときの木漏れ陽、雪に反射した下方からの光など、光は季節や時間によって千変万化し、刻々と移ろっていきます。そのさまを、あますところなく享受したいと赤坂さんは考えたのです。それだけではありません、赤坂さんがおもむろに太鼓張りした大きな障子を閉めると、たちまち部屋全体は、柔和な光に満たされた繭玉の内部さながらの親密な空間に変容しました。ゆっくり障子をスライドさせる思い入れのこもった赤坂さんの仕草、閉め終わったときの会心の笑みと満足げな表情。光の劇的な変化はもちろんのこと、こちらもなかなかの見ものでした。

吹き抜けと外部テラスを挟んで大開口部と対面する外壁(すなわちテラス左手の壁)一面には、アルミ板が張ってあります。板張りの外壁の

中で、そこだけ金属素材が張られているのはちょっと唐突に思えましたが、赤坂さんによれば、アルミ板に光の反射板の役目と、森の風景を映すスクリーンの役目をさせているとのこと。そう言われてよく見ると、アルミ板の表面には外の景色が紗幕をかけたような曖昧な輪郭で映り込んでいました。

ここまでは視覚に関する工夫ですが、テラスは集音装置として聴覚にも働きかけてきます。テラスが三角形であることは先ほど書きましたが、その形状には優れた集音効果があります。分かりやすく言えば、ちょうどメガホンの口元を耳に押し当てたような感じになり、鳥たちのさえずりや、谷川を流れる水の音や、梢を渡る風の音や、降りしきる雨の音などが増幅されて聞こえるのです。そして、そうした視覚的、聴覚的効果のすべてが「偶然そうだった」のではなく、最初から計画されていたことに、正直なところ、私は感心を通り越して、感嘆しました。住宅がこのように五感に働きかける装置として積極的にデザインされた例が古今の住宅にあったでしょうか？

さて、どうやら私は三角ベランダについて誌面を割き過ぎたようです。というのも、下の階に、この住宅のもうひとつのとおきの居場所があるからです。それは2階からの階段を下りきったところにある、L型に2段になった一種のラウンジピットです。このラウンジピットの特徴は1段1段の段差が大きいこと。正確に言うと一段の段差は384ミリですから一番低いレベルは1階の床レベルから768ミリ下がることになります。この部分はカーペット敷きで床暖房されていますから、誰もが思わず床に座り込みたくなり、座り込めば目の前は2階分の高さのある大開口部です。さらに左手のコーナーにはストープまで据え付けられていて、まさに至れり尽くせり。あぐらをかくもよし、足を投げ出すもよし、もちろん、ゴロンと寝ころんでしまうのも良いでしょう。こうやって思い思いの姿勢が取れるところが嬉しいのです。あえて欠点を述べれば、この窓から四季折々の森の景色を眺めていたら、労働意欲はまったく失せてしまうに違いないこと。ナマケモノの私には絶対にあってはならない禁断のしつらえです。ところで、このラウンジピットは最初から計画されたものではなく、工事途中に大変更して作られたのだそうです。すでに出来上がっていたRC造の床スラブを壊して、新たに地面を掘り下げて作ったと聞き、「まったく、よくやるよ!」と思わず呟きました。一方で、この魅力的なラウンジピットが、計画当初からのものではなく、迷いに迷った挙げ句の大変更で生まれたことに、私はいくらか救われたような気もしていました。だって、そうでなかったら、まだ若い赤坂さんがあまりにもソツがなく完璧過ぎて、可愛い気のない建築家になってしまうじゃありませんか。ねえ？

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。

主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT[2001]、伊丹十三記念館[2007]など。

主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上・下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ/2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版/2010]など。



1階居間の2段になったラウンジピットは森を眺めるためのとおきの観覧席である。切り込まれた吹き抜けの上部まで大ガラスが嵌め込まれている



2階食堂。テーブル背後は大開口部に差し込む直接光を拡散光に変えるための太鼓張りした片引き障子。シンプルなテーブルも赤坂さんのデザイン



森の中で入浴している気分の味わえる贅沢な浴室。床面をそのまま掘り込んだようなデザイン。この住宅は「掘り込む」が、キーワードだったのかも